

平成30年6月15日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野

〒270-1166

我孫子市我孫子1684番地

TEL:04-7185-1583(直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより

135号



月例会が開催されました

6月1日(金)に月例会を行いました。

月例会では、シフト調整と共に翌日、井上家で行われる蔵の見学会についてご案内しました。

蔵の見学会は天気にも恵まれ、お散歩途中の方もいらっしやり、飛び入り参加していただきました。ご参加いただいた方、ありがとうございました(^ ^)

「海外からのてがみ」展

今回は、杉村楚人冠記念館の高木さんに、現在記念館で開催している「てがみ展 海外からのてがみ」展の解説をしていただきました。

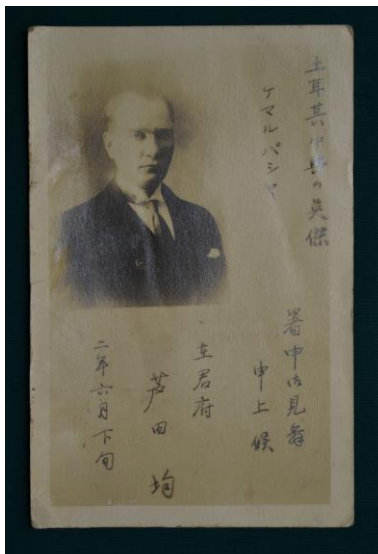
楚人冠を紹介するときに「国際ジャーナリスト杉村楚人冠」という言葉が使われます。では、なぜ「国際」なのか、それは、楚人冠の元に届いた手紙を見ることによってわかります。それでは、「国際」という言葉が合っているのか見ていきましょう。

●海外に渡った日本人から

現在はたくさんのおびとが海外旅行を楽しんでいますが、当時はどのような人が海外に行ったのでしょうか。例えば、楚人冠は新聞記者として取材をするために海外へ行きました。そこで、出会った人々は同業者もさることながら、

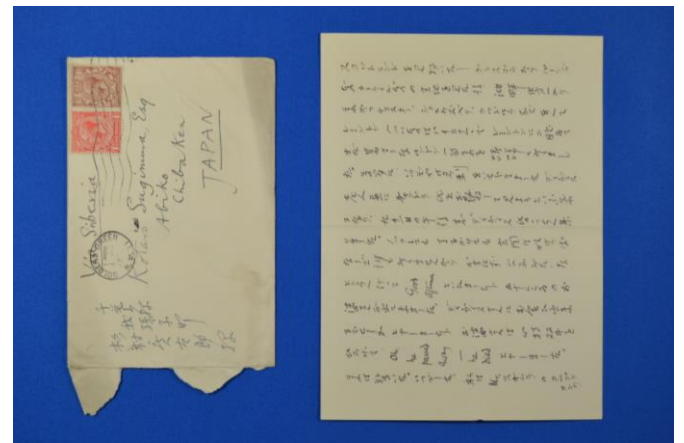
外交官、英文学者、オペラ歌手、俳優など各界で名をはせた人物たちです。そのような人々から送られる手紙にはどんな背景が隠されているのでしょうか？

例えば、第一次世界大戦で特派員として渡欧していた楚人冠は外交官の芦田均と出会います。芦田はトルコ共和国【芦田均からの絵はがき】



を建国に導いた英雄の顔写真が入った絵はがきを使って楚人冠に近況を送ります。当時、この絵はがきを受け取ったとしたら、「時の人」が写った絵はがきになります。しかし、その絵はがきを100年後見ると、時間を超えて「歴史的絵はがき」になります。なんとも不思議な気分です。二人の出会いを考えてみても、「国際色」が豊かなこともわかりますね。

次にご紹介したいのは、英文学者福原麟太郎の手紙です。その手紙にはイギリスに行った時、楚人冠の知人に、会いに行った話が書かれています。この楚人冠の知人とは、楚人冠がイギリスに特派員として訪れた際、楚人冠の寄稿を読んだイギリス人が自宅に楚人冠を招き、そこから海を隔てた交流がはじまりました。ここから民間レベルの「外交」を見ることができます。



【福原麟太郎からの手紙】

芸能界からは、舞台役者の曾我廼家五郎をご紹介します。彼はヨーロッパへ演劇の視察に行き、そこから近況を伝える手紙を出します。そこには「(船での渡航は)危険と案じていたが、海上も少し風が荒いだけで、無事にノルウェーに着いた」という旨が書いてあります。これを読んでも一般的な近況と捉えることもできますが、この背景をみると、危険な状況で旅をしていたことがわかります。曾我廼家が渡欧したのは1914年。ちょうど第一次世界大戦がはじまり、日本がドイツに宣戦布告する情勢でした。そして、

この大戦で恐れられたの武器が、ドイツ軍が保有していた潜水艦、いわゆるUボートです。曾我廼家が「危険と案じていた」のは、Uボートによる攻撃…そう考えると大変危険な状況下で投函された手紙であると共に、世界的な事件に密接していたことがわかります。

このように、世界で活躍していく日本人との交流がうかがえます。そんななか、海外で活躍した無名の職人から楚人冠に一枚の礼状が届いています。彼は、イギリス、アールズ・コートで開催された博覧会に出展していました。しかし、英語ができないため、待遇が悪い状態で働いていました。そのとき、楚人冠の助言が待遇改善につながりました。この手紙から、華やかに活躍している人々だけでなく、世界に活躍の場を求めて開拓していく人物がいたことがわかります。

●世界の新聞人

これまで、楚人冠は海外で活躍する日本人の一人であったことをご紹介しましたが、次は「ジャーナリスト」としての活躍をご紹介します。

楚人冠は英米ともに新聞業界の第一線で活躍した人物と交流していました。例えば、海外の新聞の情勢を知るためにアメリカの新聞業界誌購読していました。その創始者との交流も楚人冠邸に残る手紙からうかがえますし、アメリカで初めて新聞学科を創設し、成功に導いたウォルター・ウィリアムズとも懇意であったことがわかります。

楚人冠は記者として記事を書く才能もありましたが、同時に特派員などで海外に行く際、その国の最先端の「新聞学・新聞社としての機構」を学んで、その経験を朝日新聞社で活かしました。それは、これらの人物との交流からもうかがうことができます。

●海外で交流した人々

先ほどご紹介した福原麟太郎が会いに行った人物、ジョージ・ベル・デビス。楚人冠は「デビス老」と呼んでいますが、楚人冠邸には、そのデビス老から来たたくさんの手紙が残っています。実際に楚人冠の著書『大英遊記』では、二人の親密な様子が描かれています。そして、彼の手紙には「壮麗な富士の雄姿が脳裏に焼き付いて離れない」という日本愛を感じる文や、楚人冠の生活の変化、日本の情勢などさまざまな「日本」に興味を持っている様子がわかります。

そして、最後にご紹介したい手紙がE. Foussetからのものです。E. Fousset…男性なのか、女性なのか、文面は近況のみ。その文面は「ホノルル、サンディエゴ」などと、訪れた地名が書かれているのにも関わらず、切手はメキシコのもので、旅はまだ続いている様子がうかがえます。そんな旅をする人物の姿が楚人冠の書いた「其の女」とかぶります。「其の女」で紹介されている「F女」は、この手紙の人物のように国から国へと渡り歩いています。すると、その手紙の人物は女性なのでしょうか？謎が深まるばかりです。楚人冠が「其の女」と出会ったのは第一次世界大戦特派からの帰路です。そう考えると、その時代に女性が一人旅をして、なおかつ、楚人冠と政治談議を交わす教養と知識を持っていたということにも驚きです。



【「其の女」からの手紙】

これらの手紙を見るだけでも、「国際的」な楚人冠像を思い描くことができるのではないのでしょうか。ぜひ、資料を見に記念館へお越しください！

内覧会のお知らせ

7月25日(月) 10時から記念館、11時から白樺で、夏の展示会の内覧会を行います。また、11月2日(金)も10時から白樺、11時から記念館で秋の展示会の内覧会を行う予定です。こちらはすいぶん先なので…改めて、10月の月例会でもご案内しますね。

次回の月例会は・・・

次回は平成30年7月1日(日) 9時30分から新館で行います！！日曜日で発掘がないので、サプライズな人も復活するかもしれません？！そろそろ、暑くなる時期でしょうか？(それともまだ、梅雨が続いているのでしょうか？) 熱中症対策をしてお越しください。よろしくお願ひ申し上げます(*^-^*)